二〇二〇年度

# L 国語問題

## 注意

一　試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
二　解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。
　　HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
　　（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）
三　この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
　　なお、問題番号は一～三となっています。
四　解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
五　解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
六　解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
七　この問題冊子は持ち帰ってください。

### マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

一　マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
二　一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
三　訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

| ① | |
|---|---|
| | 1 2 3 4 5 |
| | ○ ○ ● ○ ○ |

（3と解答する場合）

一　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

ご存知の通り、カフカの『変身』は、グレゴール・ザムザが、ある日「何か気がかりな夢」からめざめるところからはじまる。すると彼は、とつぜん自分が巨大な一匹の毒虫に変身していることに気づくのであるが、めざめがけに見た彼の夢の内容については、何一つ知ることはできない。グレゴールはいったい、どんな「気がかりな夢」を見たのだろう？

われわれが知ることのできるのは、ただ彼が「何か気がかりな夢」を見るような男であるという程度のことに過ぎない。そして、それはまことに平凡なことだ。現実にわれわれが生きている以上、何一つ気がかりなことを持たぬというわけにはゆかないし、何か気がかりなことがあれば、誰だって気がかりな夢の一つも見ないわけにはゆかぬだろうからである。

『変身』は悪夢小説だ、ともいわれる。その代表的なものとさえ考えられているかも知れない。しかしそれは「夢」ではない。それどころか、「何か気がかりな夢から」めざめたところから、わざわざ小説は書きはじめられている。つまり、そう書かれている以上、これは夢ではないと断わっているようなものである。いい換えれば、夢からさめた状態が、毒虫に変身しているグレゴールなのだ。したがって、彼がめざめがけに見た「何か気がかりな夢」とは、もしかすると、すでに毒虫に変身した状態のグレゴールが見ていた夢かも知れないとも、いえる。とすれば、彼が「何か気がかりな夢」を見たということ自体が、すでに滑稽ではないか。なにしろそれは「毒虫」が夢を見たということだからである。毒虫もまた夢を見る！

まあそれも結構なことじゃないか、というわけだろう。実さい、毒虫が夢を見るものかどうか？　それをあれこれ(イ)センサクしてみたところではじまらないだろう。小説は、動物学教室の実験演習ではないし、第一にカフカは、何といってもその夢自体を書いているわけではないからだ。それにわたしは、いまここでカフカの『変身』について詳しく語ろうとしているわけでもない。「夢」の問題を少し考えてみる気になっただけだった。

夢もまた、生きているわれわれの個人的な体験である以上、それを小説の材料にして悪い理由はどこにもあるまい。例えば、『変身』なら『変身』を、次のように書き出しても決して悪くないはずである。

ある晩、何か気がかりな考えごとをしながらベッドへもぐり込んだグレゴール・ザムザは、とつぜん自分が一匹の巨大な毒虫に変身した夢を見た——。

そして、そのあとは、まったくあの『変身』の現物と同様であっても、決してそれが小説でないとは断言できない。ただ、もしそうであったならば、われわれは、あれ程までにはおどろかなかったであろう、というだけのことである。何故(なぜ)だろうか？　その理由のセンサクは(あ)ひとまず措(お)くとして、ただ、(1)小説の中における夢の場面がどことなく安易であることだけは、誰にでもわかる明瞭な事実だろう。どんなにスバラシイ（つまり恐怖であっても、豪華であっても、奔放であっても、また、淫らであっても、その度合いにおいて非凡であるという意味）夢であっても、小説に書かれた夢はどことなく薄手な感じを与える。しかし、その理由が何故であるかも、ここでは特に考えないことにしておく。

その代り、わたしの体験を一つだけ書いてみよう。あるとき、わたしはこういう夢を見た。わたしはどこかよくわからない野原の中にしゃがみ込んでいて、それは便意を催していたからだった。まわりは、唐モロコシ畑のようでもあるし、丈の高いカヤのような草に囲まれていたようでもある。いずれにせよわたしはその茂みの中へしゃがみ込んで、用を足そうとしていたわけだ。しかし、わたしはどうしても用を足すことができない。唐モロコシ畑か、(い)丈余のカヤの茂みだと思い込んでいた場所は、いつの間にかただの草原であって、ズボンをおろしてしゃがみ込んだわたしのまわりには、大勢の見物人達が輪をつくっていたからだ。見物人の中には、小学校の同級生の顔が見える。そして、わたしの兄の顔も見えた。その他、どんな人間がいただろうか？　そのあたりは忘

れてしまっているが、便意はますます募ってくるにもかかわらず、わたしはどうしても用を足すことができないのである。

わたしにいま記憶として残っている〈事実〉のみをのべれば、そういう夢であった。そして、その夢からさめたあと、わたしはトイレットへ立って行き、わたしは自分が珍しく便秘を起こしていることに気がついたわけだ。ははあ、こういうことだったのか、とわたしは、これも珍しいことだが、そのことをノートに記録した。

とはいっても、わたしはノートの上に、自分が見た夢を、いわゆる文学的に〈再現〉したのではない。わたしはただ、〈便秘〉という生理的な状態が、夢の中では〈見物される〉という別の状態に変化していた点に、興味を抱いたに過ぎない。つまり、便意を催しているにもかかわらず用を足すことができない——という状態は、現実も夢も同様である。しかし、その〈理由〉〈原因〉が異なるわけだ。現実においては、その〈理由〉〈原因〉は〈生理〉である。然(しか)るに夢の中では、それが〈心理〉に変換されている。要するに、(2)〈原因〉〈理由〉が変換されたわけだ。これが、その夢を体験したあとの、わたしの発見であった。

①、だからといって、これこそ夢の原理だなどというつもりは、(ロ)モウトウない。ベルグソン(注1)とかフロイト(注2)とかの夢論と、結びつくのかつかないのか、そういうこともわたしにはどうでもよい。②、こういう夢の見方をするのは、人間の中でもわたし一人であるのかも知れないし、また、わたし自身、毎回この方法で夢を見ているのかどうかさえ、わからないのである。③わたしは、夢一般の法則というものを考えたわけではなかった。わたしが興味を抱いたのは、あくまでもその夢一つに限ってのことである。

そしてさらに限定すれば、その夢のうちでも、わたしが本当に興味を抱いたのは、その中でわたしの置かれていた「用を足せない」という状態を支配している〈原因〉が、変換されていることだけだった。変換されるのは〈原因〉なのだ！　これがわたしの発見であり、その発見にわたしは満足したのである。

見物人の顔など、大したことではなかった。つまり、しゃがみ込んでいるわたしを輪になって見物している人間たちの中に、誰と誰の顔があって、誰と誰がいなかったかといった事柄は、わたしには余り興味がなかった。

あるいは本当に興味があるのは、その顔ぶれなのだ、というひとがいるかも知れない。そういうことをいうのは、フロイト自身かどうかは別として、たぶん心理学者か、そうでなければ、小説の中へ夢の場面を書き込んだりする小説家たちだろう。彼らはおそらく、そのとき誰が見物していたのか、というそのことを重大視するに違いない。[3]

男なのか、女なのか？　それは夢の中の「わたし」の過去、現在、未来にとって、いかなる関係を持つ人物であるのか？　また彼らは、「わたし」にとって加害者であるのか、被害者であるのか？　いったい誰が「わたし」を妨害し、痛めつけあるいは笑おうとしているのか？

たぶん、小説の中に夢の場面を書き込もうとする作家ならば、そのような点を重視するはずである。それは、たぶん、夢をもって何かを代弁させようと考えるからだ。作中人物の心理――恐怖とか不安とか、劣等感とか、憧れとか、孤独とか、そういったものを表現する一つの方法として夢を考えるためであろう。

そして、小説に書かれた夢が、どことなく安易で薄手に見えるのは、そのために他ならない。いい換えれば、その場合の夢は、ある人物を説明するための単なるエピソードに過ぎないわけだ。であれば、それは必ずしも夢でなくともよいだろう。夢でなくてはならないという必然性はないはずである。ただ、夢の方が便利であるのは、そうした方が書き易いから、というだけのことになる。書きにくいことは、何でも夢にしてしまえば簡単だというのならば、夢はいわば、現実を説明するための、現実よりも安直なる手段という以外になくなってしまうわけだ。

そしてその考え方でゆくならば、わたしがいま実例としてここに提供した夢では、結局、見物者の顔を問題とせざるを得なくなるだろう。肝じんなのは彼らの顔であって、それを書かなければ、その夢の利用価値はほとんどなくなってしまうわけだ。また逆にいえば、その顔の中に、現実を説明するために好都合な、いろいろな顔を登場させることもできるということであろう。あたかもそれこそ、夢の〈自由〉であるとでもいうかのごとくに、[4]である。

しかし、(5)本当の意味での夢の〈自由〉は、もう少し別のところにあるのではないか。それは、夢というものを、ある人物のある種の内部世界の表象としての一場面と考えるのではなく、夢自体を一つの構造として考えるということだろう。夢をもって、ある一つの場面を語らせるエピソードと考えるのではなく、それ自体が、生きている人間の世界をその中に捉えることのできる構造として考えるわけだ。『変身』は、悪夢小説といわれているとしても、決して夢を書いたものではない。しかしそこには、夢の方法が用いられている。つまり『変身』は、夢を書いたのではなく、夢の方法によって書かれているわけだ。夢の論理によって書かれた現実なのである。そこでは夢は、われわれが生きている現実、人間と人間とが関係している世界というものを捉える方法として考えられているわけだ。その意味で、これを〈夢のリアリズム〉と呼ぶことができるだろう。

問題は、その夢の論理というものだろう。例えばわたしの見た夢の場合、そこにおいては、〈原因〉が変換されていたことを発見した。つまりそれはめざめている現実の場面における［a］とは、もう一つ別の［b］の発見である。もちろん、もっといろいろと多くのことが、夢から発見されるに違いない。ただわたしがいいたいのは、あのように取るに足りぬ貧弱な一つの夢ではあっても、よく考えてみればそこから何ごとかを発見することはできる、ということである。

もちろん問題は、それの発見がわれわれの生きている現実の本質にかかわるかどうか、ということだろう。また、われわれが人間や現実を考えてゆく上で、より自由な眼(め)となり得るかどうか、ということでもある。

（後藤明生「笑いの方法」より）

（注）1　ベルグソン――アンリ・ベルクソン（一八五九～一九四一）、フランスの哲学者。

2　フロイト――ジークムント・フロイト（一八五六～一九三九）、オーストリアの精神分析学者。

問

(A) ═══線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書で記すこと）

(B) ～～～線部(あ)・(い)について。それぞれの本文中の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。

(あ) ひとまず措く

1 きっぱりあきらめる
2 しばらくかりる
3 とりあえず分ける
4 一応たしかめる
5 いったんやめにする

(い) 丈余

1 広々とした
2 がっしりした
3 幅の広い
4 びっしりとつまった
5 十分な高さのある

(C) ═══線部(1)について。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 夢であることを示すために、現実的な世界との隔たりが強調される場合が多いから。
2 人の見る実際の夢の方が、恐怖や豪華、奔放などが、その度合いにおいて非凡であるから。
3 その度合いにおいて非凡である恐怖や豪華、奔放などは、夢の中では実現しないから。
4 作中人物のある種の内部世界を表象する手段として、夢が用いられる場合が多いから。
5 夢の中ではどのようなことでも都合よく起こるものと、多くの人が認めているから。

(D) ═══線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 便意を催しても用を足すことのできないような夢の中での心理的な状態が、便秘という生理的な現象に置き換えられて現実に現れた。
2 生理的な理由によって用を足すことのできない状態が、夢の中では人に見られているから用を足せない状態に置き換えられた。
3 現実においては生理的感覚に左右されることの多い人間関係が、夢の中では見物される恥ずかしさという

具体的な心理的理由に基づくものに置き換えられた。

4　生理的な状態である便秘が、夢の中では便意を催しているのに用を足すことのできないような気持ちという心理に置き換えられた。

5　便秘という生理的な状態の原因が、夢の中でわたしを取り囲んだ大勢の見物人達との人間関係に置き換えられた。

(E)　空欄 ① ～ ③ に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　①しかし　②だから　③あるいは
2　①したがって　②また　③そして
3　①もちろん　②あるいは　③つまり
4　①また　②そして　③なぜならば
5　①けれども　②しかしながら　③だから

(F)　――線部(3)について。一部のひとたちがそのように考える理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　夢が、それを見た人の人間関係に関する心理を表現しているから。
2　隠された人間関係こそ、多くの人が興味を感じる事柄だから。
3　人を取りまく人間関係の実態が、夢の場面に直接的に現れるから。
4　現実世界を生きる人にとって、人間関係こそが最も重要な問題であるから。
5　人は表に出せない人間関係への思いを夢によって表現しようとするから。

(G)　――線部(4)について。ここでの「夢の〈自由〉」の内容として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　夢の場面を利用することによって、登場人物の人間関係を現実よりも多彩に表現することができる。
2　現実にはありえないことであっても、夢の中という設定ならば、どんな人物でも登場させることができる。
3　描きたい現実を説明するのに好都合な夢を登場人物に見せて、いくらでも夢を便利に使うことができる。
4　夢という設定の中ならば、話を展開させるのに好都合な人物を次々に登場させることができる。
5　登場人物の見る夢の利用価値を、作家に好都合なようにどこまでも拡大することができる。

(H)　――線部(5)について。その内容を「夢から」で始まり「できること」で終わるようにまとめた場合に、左の空欄［　　］に入れる言葉を、句読点を含めて二十字以内で記せ。

本当の意味での夢の〈自由〉　＝　夢から［　　］できること

(I)　空欄［a］・［b］には、原因と結果の関係にかかわる同じ言葉が入る。その言葉を漢字二字で記せ。

(J)　次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　カフカの『変身』では、毒虫に変身した登場人物の見た「気がかりな夢」が悪夢として描かれている。
ロ　夢の中では、恐怖や豪華、奔放などは、その度合いにおいてどんなに非凡であっても薄手に感じられる。
ハ　わたしは大勢の見物人達の輪の中で用が足せない夢を見た後、見物人達の顔ぶれをノートに記録した。
ニ　現実に即して小説を書くのは難しいが、夢の中での話にしてしまえば簡単に書けるようになる。
ホ　〈夢のリアリズム〉とは、夢を描くのではなく、夢の構造の中に人間の現実を捉えることである。

二　左の文章は、三国時代の夢占い師、周宣の話である。これを読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

嘗有レ問レ宣ニ曰、「吾昨夜夢ニ見ル二(注1)芻狗一、其ノ占何ゾ也。」宣答ヘテ曰、「君欲レ得ニ美食一ヲ耳。」有レ頃、出行、果タシテ遇フ二豊膳一ニ。後ニ又問ヒテレ宣ニ曰、「昨夜復タ夢ニ見ル二芻狗一ヲ、何ゾ也。」宣曰、「君欲ス二堕チテレ車ヨリ折レ脚ヲ、宜戒慎之。」(1)頃しばらくして之、果タシテ如シ二宣ガ言ノ一。後又問フレ宣ニ、「昨夜復タ夢ニ見ル二芻狗一ヲ、何ゾ也。」宣曰、「君ガ家失火、当ニ善ク護ルレ之ヲ。」(2)俄ニ遂ニ火起コル。語リテレ宣ニ曰、「前後三時、皆不ルレ夢ミ也。聊カ試ミシレ君ヲ耳、何ヲ以テ皆験アル邪カト。」宣対ヘテ曰、「(3)此神霊動レ君使レ言、故ニ与ニ真夢一ニ無キレ異ナル也。」又問ヒテレ宣ニ曰、「三タビ夢ニ芻狗一ヲ而其ノ占不ルレ同ジカラ、何ゾ也。」宣曰、「芻狗者ハ、祭ルレ神ヲ之物ナリ。故ニ君ノ始メノ夢当ニ得ニ余食一ヲ也。祭祀既ニ訖ハレバ、則チ芻狗為ル二車ノ所一ト轢ヒク、故ニ中ノ夢当ニ堕チテレ車ヨリ折レ脚ヲ也。芻狗既ニ車轢キテ之後、必ズ載セテ以テ為スレ樵ト、(4)故ニ後ノ夢フル憂ニ失火一ヲ也。」宣之叙ノブレ夢ヲ、凡ソ此ノ類也。十中ニ八九、世以テ比ス二建(注3)平之相一ニ矣。

（『三国志』による）

（注）1　芻狗――わらで作った犬。　2　樵――たきぎ。
3　建平――朱建平。三国時代に人相等を占った著名な相術師。

問

(A)――線部(1)の返り点と読み方の組み合わせとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　宜三戒一慎之（まさにこれをいましめつつしまんとすと）
2　宜二戒一慎レ之（まさにこれをいましめつつしまんとすと）
3　宜レ戒レ慎レ之（よろしくこれをつつしむことをいましむべしと）
4　宜三戒一慎之（よろしくこれをいましめつつしむべしと）
5　宜二戒一慎レ之（すべからくこれをいましめつつしむべしと）
6　宜レ戒レ慎レ之（すべからくこれをつつしむことをいましむべしと）

(B)――線部(2)「俄」の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　ほどなく　2　やっと　3　わずかに　4　結局は　5　すみずみまで

(C)――線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　夢判断が当たるのは、占い師の神霊がそのように計らっているのだ。
2　夢というのは、神霊があなたに乗り移っている時に見るものだ。
3　神霊が芻狗の姿になって夢に現れ、あなたに危険を伝えようとしたのだ。
4　あなたがわたしに夢判断を持ちかけたこと自体が、神霊のはたらきによるものだ。
5　夜の三時に夢を見ないのは、神霊があなたを活動させようとするからだ。

(D) ――線部(4)「中」と同じ意味の「中」を含む熟語として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 命中　2 中秋　3 折中　4 中枢　5 中断

(E) 本文から読み取れる芻狗の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 祭祀の時に用いる道具の一つで、神が宿るため、粗末に扱った者は禍に遭う。
2 人の代わりに厄を引き受けるものであり、焼かれてはじめて威力を発揮する。
3 霊魂があの世とこの世を行き来する際の乗り物で、夢の中から現れる。
4 祭祀中は大事に扱われるが、それが終われば車に轢かれて焼却される。
5 芻狗の夢は吉兆の場合もあれば凶兆の場合もあるが、素人にはその判断は難しい。

(F) 本文の内容として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 三回とも同じ芻狗の夢を見たのに、夢判断がそれぞれ異なったのは、祭祀中と祭祀後の芻狗の扱われ方の違いによる。
2 夢と現実とはどこかでつながっていて、夢から未来を予言することはできるが、夢に見ていないことは占えない。
3 芻狗を夢に見たのは、芻狗に乗り移った神霊が、その人に夢を通して何かを伝えようとしたからである。
4 周宣に夢の意味を問うた者は、じつは周宣を試そうとしていて、ほんとうは夢を見ていないのに、夢を見たと偽った。
5 ある者が三回にわたって嘘の夢を周宣に判断させようとしたため、車から落ちたり、火災に遭ったりした。

三　左の文章は、『源氏物語』の「竹河」の巻の一節で、鬚黒太政大臣（故殿、殿）亡き後、その妻である玉鬘（上、尚侍の君）と子供たちが語り合っている場面である。二人の姫君たちが碁を打つ手を休めている様子を見た兄の中将が感慨を述べるところから始まり、最後は母玉鬘が発言するところで終わっている。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

碁打ちさして恥ぢらひておはさうずる（注1）、いとをかしげなり。「内裏わたりなどまかり歩きても、(1)故殿おはしまさましかば、と思ひたまへらるること多くこそ」(a)など、涙ぐみて見たてまつりたまふ。二十七（注2）、八のほどにものしたまへば、いとよくととのひて、この御ありさまどもを（注3）、(2)いかでいにしへ思しおきてしに違へずもがなと思ひゐたまへり。(b)(c)

御前の花の木どもの中にも、にほひまさりてをかしき桜を折らせて、「外のには似ずこそ」などもてあそびたまふを、「幼くおはしましし時、この花はわがぞわがぞと争ひたまひしを、故殿は、姫君（注4）の御花ぞと定めたまふ、上は、若君（注5）の御木と定めたまひしを、いとさは泣きののしらねど、安からず思ひたまへられしはや（注6）」とて、「この桜の老木になりにけるにつけても、過ぎにける齢を思ひたまへ出づれば、(d)あまたの人におくれはべりにける身の愁へもとめがたうこそ」(e)など、泣きみ笑ひみ聞こえたまひて、例よりはのどやかにおはす。人の婿になりて、心静かにも今は見えたまはぬを、花に心とどめてものしたまふ。

尚侍の君、かくおとなしき人の親になりたまふ御年のほど思ふよりはいと若うきよげに、なほ盛りの御容貌と見えたまへり。冷泉院（注7）の帝は、多くは、(3)この御ありさまのなほゆかしう昔恋しう（注8）思し出でられければ、(4)何につけてかはと思しめぐらして、姫君（注9）の御事を、(5)あながちに聞こえたまふにぞありける。院へ参りたまはんことは、この君たちぞ、「なほもののはえなき心地こそすべけれ。よろづのこと、時につけたるをこそ、世人もゆるすめれ。げにいと見たてまつらまほしき御ありさまは、(6)この世にたぐひなくおはしますめれど、盛りならぬ心地ぞするや。琴笛の調べ、花鳥の色をも音をも、□に従ひてこそ、人の耳もとまるものなれ。春宮（注11）はいかが」(7)など申し

たまへば、「いさや、はじめよりやむごとなき人の、かたはらもなきやうにてのみものしたまふめればこそ。なかなかにてまじらはむは、胸いたく人笑へなることもやあらむとつつましければ。殿おはせましかば、行く末の御宿世宿世は知らず、ただ今はかひあるさまにもてなしたまひてましを」などのたまひ出でて、みなものあはれなり。(8)

(注12)

(注)

1 おはさうずる――「あり」の尊敬語「おはさうず」の連体形。

2 二十七、八のほどに――中将の年齢が二十七、八歳ぐらいで。

3 この御ありさまども――姫君たちの様子。

4 姫君――長女の大君。

5 若君――次女の中君。

6 いとさは泣きののしらねど――私（中将）はそれほど泣いて騒ぐことはなかったが。

7 冷泉院の帝――冷泉院。かつては帝であったが、今は引退している。

8 昔――冷泉院が帝位に就いていた頃、鬚黒と結婚する前の玉鬘を妻にしようと思っていたことがあり、今も玉鬘への思いを残している。

9 姫君の御事――玉鬘の娘大君が冷泉院にお輿入れすること。

10 この君たち――姫君たちの兄君たち。

11 春宮――皇太子。

12 やむごとなき人――真っ先に春宮の妻となった大臣の長女を指す。

問

(A) ――線部(1)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　父がもう生きていらっしゃらないので、内裏では自由気ままに歩き回ることができない。
2　亡き父が生きていらっしゃったならば、内裏と自邸とを頻繁に行き来していただろうに。
3　父はもう生きていらっしゃらないのに、寂しくなってついお姿を探してしまう。
4　父がもう生きていらっしゃらないので、父と一緒に碁を打って楽しむこともできない。
5　亡き父が生きていらっしゃったならば、我が家はもっと繁栄できていただろうに。

(B)　――線部(2)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　何とかして昔から考えていた方針のままで行きたいものだ。
2　どうして昔から抱いてきた思いをひるがえすのか。
3　何とかして亡き父の御意向に背かないようにしたいものだ。
4　どうして亡き父のお考えを違えることがあろうか。
5　どうあっても亡き父の御遺言に背くことはあり得ない。

(C)　――線部(3)「この御ありさま」とは誰の様子か。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　玉鬘　2　大君　3　中君　4　中将　5　鬚黒

(D)　――線部(4)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　玉鬘にどうしたら喜んでもらえるだろうか。
2　玉鬘への贈り物を何にしたらよいだろうか。
3　どのような理由があれば玉鬘に会えるだろうか。
4　大君が玉鬘に似ていないことがどうしてあろうか。
5　何を口実にしたら大君と結婚できるのだろうか。

(E)　――線部(5)の現代語訳を五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(F) ――線部(6)「御ありさま」とは誰の様子か。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 玉鬘　2 大君　3 中君　4 冷泉院　5 春宮

(G) 空欄 □ には本文中にある漢字一字が入る。どのような語を補ったらよいか、最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 涙　2 親　3 昔　4 時　5 末

(H) ――線部(7)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 春宮は冷泉院の御意向をどのようにお考えでしょうか。

2 春宮のお美しさはいかばかりでしょうか。

3 春宮からはどのような御要望がありましたか。

4 春宮から大君に求婚の御申し入れはありましたか。

5 春宮に大君を差し上げるのはいかがでしょうか。

(I) ――線部(8)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 悲しんでいる。　2 嬉しい気持ちである。　3 趣深く感じている。

4 感動している。　5 優美な風情である。

(J) ――線部(a)～(e)のそれぞれについて、尊敬語であるものを1、謙譲語であるものを2として、それぞれ番号で答えよ。

(K) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 姫君たちが幼い頃、庭の桜の花を自分のものだと言い張って争っていたのを、中将はほほえましく見守っていた。

ロ 中将は、鬚黒邸から出て妻の家に住んでいるが、今日は鬚黒邸の美しい桜の花を愛でてゆっくりと時間を過ごしている。

ハ　冷泉院は、昔から恋い焦がれていた玉鬘の代わりに、その面影を宿している娘大君との結婚を心の底から望んでいる。

ニ　冷泉院への大君のお輿入れに兄たちは反対しているが、その理由は、冷泉院が引退して権勢を失っているからである。

ホ　玉鬘は、夫髭黒太政大臣が亡くなって権勢を失っても、亡き髭黒の遺志を継いで、姫君を帝のもとに入内させようとしている。

【以下余白】